

熱狂と羞恥

—19世紀のパリ、ロンドン、ニューヨークにおけるゴム製衣類

リール第3大学北方歴史研究所研究員 マニユエル・シャルピー

はじめに

1858年、ノルマンディー海岸沿いにできたばかりの流行のリゾート地を、軽やかに動く人影があった。その衣服を着ていた女性たちは悪天候をものともせず、その優雅な様子に引きつけられたパリの評論誌『アーティスト L'Artiste』の記者は次のように書いた。「シエルブールでは、パリや国外から来た美しい女性たちが、(中略)スコットランド風の柄とタフタを再現した(中略)すべすべした流行のゴム製衣服を着ていて、画一的な服装をしたほかの女性たちからひととき目立っている。実用的で、かつ優雅だという点で、ゴム製衣類が優れているのは明らかである。」(註1) パリのラティエ&ギバル社のために書かれたこの「誇大広告」は、明らかにゴム製衣類に対する熱狂を大仰に書いていた。とはいっても、この記事は、19世紀中頃には、男性向け女性向けともに都会のファッションの場面でゴムが用いられていたことを示す資料のひとつとなっている。1840年代初めに、ゴムの加硫技術(ゴムに硫黄を加えて科学的特性を高める工程)が、アメリカ、イギリス、そしてフランスで同時期に開発された。加硫ゴムの登場によって、この「奇跡」の素材を日常生活に、なかでも衣類に活用する無数の可能性が開かれたのだ。しかしながら、わずか半世紀経つ頃には、ブルジョワ階級のあいだでゴムは低俗で品がないと見なされるようになっていた。

ファッションを素材の側面から問うのは、衣類をあらゆる角度から、つまり産業、社会、文化、そして身体の歴史という角度から検討するための、ひとつの方法である。また、この方法を採用することによって、産業とファッションの中心地であったパリ、ロンドン、そしてニューヨークなどの大都市で、産業化時代にファッションが現象としてどのように形成されたのかを理解することができる(Riello 2009; Riello and McNeil 2010; Verley 1997)。どうしてゴムは、1840年から1860年にかけての衣服産業において、技術的課題と消費者の需要の双方に応える魔法のような解決策として、人びとの目に移ったのだろうか?どのようにしてゴムは身体文化のなかで正当性を獲得し、衣服と身体のあいだの関係を仲介したのだろうか?この新しい素材は五感——特に触角と嗅覚——でどのように認識され、文化的、社会的な差異化のプロセスとどのように関係していたのだろうか?そして最後に、この歴史に

ついて検討することによって、ある素材の社会的、文化的表象が、医療文化や身体文化、セクシュアルな実践によって形作られながら、いかにして人びとを熱狂へと駆り立てたり、拒絶へと導いたりするのかを明らかにすることができる。ファッションの歴史とは、トレンドが社会的に生み出される過程の歴史であるのと同時に、トレンドの終焉や嫌悪感における歴史でもある。実際のところ、ファッションの歴史は物質文化という角度から読み取ることができるのだ。「モノの社会的寿命」について、とりわけありふれた物質の社会的寿命——その誕生と死——について書くのは、文化と身体、そしてファッションの社会的効用との関係について理解し、描写するためのひとつの方法である (Appadurai 1997; Kopytoff 2001)。

ゴム製衣服産業界の夢

19世紀初頭から、工業製品の考案者たちはゴムから靴や衣類製品を作ろうとしていた。フランスでは——1928年にラティエ&ギバル社が創設され、1832年にはアメリカでロクスバリー・インド・ラバー社が、1824年にはイギリスでマッキントッシュ社がそれぞれ設立していた——ゴム会社は衣類に専念していた。それは、この産業がもっとも魅力的な経済分野だったからである(註2)。実際のところ早くも1820年代と1830年代には、そして紛れもなく1840年代までには、衣服生産に変化が現れ、影響はファッションにも及んでいた。つまりこの時期に、衣服産業でサイズを固定した既製服の生産が開始されたのである(註3)。また、これと同時期に、織物の機械化につづいてミシンが発明された(Miller, B. M. 1981)(註4)。このような状況のもとで、化学者や機械技術者、そして工業裁縫業者は、ゴムに刺激を受けて産業の構想を膨らませた。ゴムを応用した最初の分野のひとつが、陸軍であった。例えば、ボストン付近で創設された巨大なロクスバリー・インド・ラバー社は、1830年代に、靴を含む数々のゴム製の軍用品を生産することを試みた(註5)。ワシントンD.C.のポトマック川で開催された実演会は首尾よく終わったものの、軍隊で実用してみると、暑いときはゴム製品がねばねばして形が崩れるうえに悪臭を放ち、逆に寒い時には凍って硬化してしまった(註6)。この問題のために多数のゴム製衣類工場が倒産に追い込まれた。特に、1830年代末のマサチューセッツでの苦境は深刻なものであった。しかし、加硫技術のおかげでゴム製品の品質が安定化するようになった1840年代初頭以降、ゴムは実質的にも無限のポテンシャルを秘めた素材となった。製造業者たちはゴム製品のあふれる世界を夢見て、そのような世界を作り出した。機関車の緩衝器、玩具、家具、絶縁体、庭用のホース、排水管、フィギュア、写真立て、装身具、そしてなによりも衣類製品と靴を作ったのだ(註7)。さらに、アメリカとヨーロッパに原材料を供給していたジャワ島、ブラジル、ペルーからの(汽船による)海上輸送が19世紀中頃に増加すると、この夢は実現するように思われた(註8)。

パリとその周辺地域は、ボストンやロンドンとともに、ゴム産業の中心地のひとつにな

った。例えば、1848年に商工会議所がおこなった産業統計調査は、「50年前には誰も知らなかった」というこの産業が発展していることを確認した。1847年の時点で、パリだけで25の製造業者が577人の労働者を雇用しており、輸出向けに大規模生産を行っていた（註9）。この時期に、フランスからイギリスとアメリカへの輸出実績は急激に増加した。ゴムの用途は無数にあるように思われた（註10）。1851年に刊行された『商業総合事典 Dictionnaire universel du commerce』では、考えられる用途を列挙する試みから次のように記している。「ゴムが滑らかで、伸縮自在で、弾性があり、水にも溶けないという事実は、多数の発明家の（中略）意欲を掻き立てた」。ゴム製品は、「海で働く者」や「屋外で働く者」、そして「ベッドの中で暖かくして過ごす」のを望む者のために作られた。また、屋根から雨が浸水してこないようにしたり、「壁に湿気がたまって壁紙を腐らせ、空気を汚染するのを防止」したり、「袋に食料や果物を保存」したり、「遠くに種子や貴重な植物を運搬」したり、「防水性の靴や帽子を製作」したりするためにも、ゴムは利用された（註11）。とはいえ、主要だったのは衣服産業であった（Figs. 1）。

ゴムには衣服産業のなかで、弾性というはっきりした目新しい利点があった。糸状にされたゴム——ぎざぎざの切れ端やコーティングされた糸——からは弾力のある生地が作られた（註12）。既製服産業が成長すると、製造業者たちはサイズの固定された、しかも弾力性によってあらゆるタイプの身体に合うような衣服を大量生産することを考えた。この特性は、靴を大量生産する際にも魅力的に映った。サイズの問題に手を焼いていたからである。1840年代末以降、フランスのラティエ&ギバル社やハッチンソン社、イギリスのマッキントッシュ社やハンコック社、そしてアメリカはコネチカット州のグッドイヤー・インド・ラバー製造会社は、靴職人がオーダーメイドで作ったものを手本に靴の生産をし、市場に出していた（註13）。例えばパリの南方にあるモンタルジでは、ハッチンソン社が設立した「国立軟質ゴム会社 Compagnie nationale du caoutchouc souple」が、「エーグル Aigle」というブランド名の靴を1日に14,000足生産していた（註14）。ゴム靴は皮を模しており、足によく馴染んだ。広告業者はそれを、「シンデレラのゴム靴」と表現した（註15）。1850年頃には多くの製造業者が、ゴム糸でできた生地とゴムの切れ端を使った、ワンサイズの革靴も兼ねたような靴の製作を試みた。誰でも履ける靴を作るのが、彼らの狙いであった（Lacroix 1867: 310）。

ゴムが加硫の程度によって柔らかくも硬くもなることから、製造業者たちはますますゴムに惹きつけられた。従来、衣服や靴は10種類程度の素材から作られていたが、ゴムにはそのすべてに取って代わる可能性があった。ゴムの登場によって、縫製の問題が一挙に解決した。すなわち、縫い目が置き換わり——ミシンが普及する1860年代まで、縫い合わせる作業を工業化するのは困難だった——靴からはネジと釘が置き換わった（註16）。製造業者たちは衣服と靴を一体に成形したり、ゴム乳剤で接着したりすることを夢見た。靴や衣服を修理するときにも、ゴムは有用だとされていた。「修理するには、グッタペルカの

樹脂片を擦り切れた箇所に貼りつけるだけでよい」と、シャルル・デュパンは 1851 年の万国博覧会に出展されたゴム製品について書き記した (Dupin 1862: 10)。ほころびができればたびたび修繕していた社会にあっては、何度も何度も修復できる衣服は、治癒が可能な第二の皮膚のようなものであると同時に、家計にとっても夢のような製品であった。

1850 年代になると、ゴムの優雅さを称賛していたファッション誌は、ゴムがあらゆる種類の素材に似せることができるという実用性を褒め称えた。当時は産業全体がマホガニーの代わりに混凝紙 (パピエマシェ) を、石材の代わりにセメントを、そして青銅の代わりに石膏を用いていた時代であった。そしてゴムもまた他の素材の模造品となる造型素材のひとつであると見なされ、成型の際に横畝織りからタフタ、ダマスク織り、レースなどの精巧な生地の外観に似せたり、糊付けしてフロック加工を施したりしていた (註 17)。18 世紀末以降ゴム生地はグッタペルカでコーティングされるようになっていたものの、その表面は依然としてねばねばしていた。加硫技術が発明されると——アメリカではインド産のゴムが加硫ゴムの別称となった——、マッキントッシュ社は、生地にシャーリングを入れるためのゴム糸を生産した。

それだけでなく、それ自体は無色のゴムに、白色の酸化亜鉛を混ぜ合わせることによって、あらゆる色合いを出すことができたばかりか、その糸をジャカード織機で織りあげることによって、色付きの模様が入った生地を作ることもできた (註 18)。当時新たな化学産業が興隆したおかげで、大衆ファッションのなかに数々の色彩が取り込まれるようになっていたこともあり、この技術はきわめて重要であった (註 19)。ウールやベルベットを模したコートから模造タフタで織られたドレス、リネンや綿のような肌触りの肌着、帽子の装飾用の造花、そして人工皮革の靴まで、人々の頭のとっぺんからつま先までがゴムによって覆われるようになった。このようにしてゴムは、身体全体を覆う万能の素材となったのである (Figs. 2)。

衣服産業がゴムに熱狂したもうひとつの理由は、ゴムが防水の性質を備えていることにあった。この性質は、特に外出用の衣類にとって有用であった。雨や雪はゴム製のゲートルや靴、帽子、そしてコートに浸透しなかったからである。同時期にブルジョア階級のあいだで、村落部——釣りやウォータースポーツ、山登り——だけでなく都市部——ショッピングなど——でも余暇を過ごす時間が増えたことから、新たな種類の生地が望まれるようになっていたのだ。

防水性というゴムの性質は、肌着にも活用された。当時は流行が移り変わっても同じ衣服が 10 年以上使いまわされていたことから (Charpy 2008)、労働者の衣服と同じくブルジョワ階級の人々が来ていた衣服——オールシーズンのスーツ——も、汗が原因でゆっくりと劣化していった。特に青色のつなぎ服は、劣化が激しかった (Thompson 1996[1968])。19 世紀を通してこの問題を解決したのが、フランス語で「腕の下 dessous de bras」と呼ばれた脇当てであり、これを装着することによって服に見苦しい汗染みができたり、変色したりす

るのを防ぐことができた。製造業者たちはゴム製の脇当てや、内側をゴムでコーティングして汗染みが見えないようにした衣服を売り出した（註20）。

彼らはさらに、豪華な生地（アルパカ、タフタ、サテン）や、ほかのいくつかの生地をゴムでコーティングすれば、ドレープがより美しくなり、しわが付かなくなることを発見した。これは、製造業者と、製造業者から届いた衣服にアイロンをかけなければならない小売商、そして消費者にとっても、好都合なものであった（註21）。

19世紀は、衣服——特にブルジョア階級の男性服——にアイロンがかけられるようになった時代であった。また、アラン・コルバンが書いているように、19世紀は「洗濯物の世紀」でもあった。より多くのリネン類と下着が着用されており、人々がそれらをこまめに洗濯する様子は、衛生に対する強迫観念が新たに現れ、衛生と良き振る舞いが関連づけられていることを示唆している（Corbin 1986; Kelly 2010）。下着とリネン類は染みひとつないようにならなければならなければならなかったために、煮沸や叩き洗い、塩化物による洗浄が行われた。それは、下着とリネン類の所持者の倫理観を表すものでもあった。ゴムやセルロイド製の着脱可能な襟やカフスは、洗濯が簡単で、すばやく乾燥し、強力な洗剤で洗うことができた。事務職ポストの急速な拡大に対し、「ホワイトカラー」への需要が高まっていくにつれて、中流階級の人々は見た目が安っぽい紙襟の代わりに、清潔な襟を着用するための方法を見いだしたのである（註22）。アメリカにおけるゴム製下着の広告によると、中国系移民——洗濯屋としてステレオタイプ化されていた——が職を失ったという（註23）。

ゴム生地が人々の集合的想像力のなかで身体の清潔さを保つ物質となったことによって、ゴム製下着の成功はより確かなものとなった。製造業者はこぞって、家庭内の健康管理のための商品をあつかう成長中の市場に投資した。1840年代以降、浣腸器や局部サポーター、帯具や、その他の医薬補助品が、人々にとってますます身近な存在となった（註24、Fig. 3）。そして、衣服販売業者はこの種の想像力をうまく利用した。すなわち彼らは、パリやロンドン、ニューヨークで、ゴムを「清潔な生地 *tissus hygiénique*」として売り出したのである（註25）。

ゴム製衣類、快適さと蒸気、および立ち振る舞いのあいだで

衣服とファッションについて検討するのであれば、社会における身体文化にもふれることになる（Corbin et al. 2006）。衣類は人々の動きかたや振る舞いかたに影響を与えるのだ。19世紀末にソースティン・ヴェブレンが『有閑階級の理論』（1994 [1899]）で述べたように、ブルジョア階級の衣服は実用的であってはならなかった。ブルジョア階級の人々が着用する服装は、彼らには肉体労働ができないのだと社会的な場で示すようなものでなければならなかったのだ。身体文化には社会的地位だけでなく、倫理や立ち振る舞い、医学も関わっ

ていたのである。

こうして 1840 年代以降、ゴム製衣服の登場にともなって多数の問題が持ち上がった。処世術——社会内の礼儀作法に関する規則——は、人々に発汗を制御するよう説いた。とはいえ同時に、体内を流動する体液の秩序に関する新ヒポクラテス主義的な理解のうえに立つならば、身体は絶えず蒸気を発しているはずだった。そこで、防水性というゴムの性質が問題となった。衛生学者たちはゴムを非難したが、それは、ゴムが身体周辺の空気の循環を妨げ、皮膚呼吸と「濃縮した発汗」(Lévy 1845; Turgan 1865) を止めるからであった。ニューヨークの医療記者、ウィリアム・ウィッティ・ホールが編集した入門書である『健康への道標』によると、ゴム靴が「便利なのは、地面が泥や溶けかけた雪でぬかるんでいるときだけである。実際にそのような場合にはゴム靴はとても有益で、代わりになるものがないほどだ。」しかし、「インド産ゴムの靴には足を冷やすという傾向があり、それゆえに履く人の健康を害し」、数多くの皮膚病を招く、としている (Hall 1869: 439-40)。フランスの衛生学者、ランガードは、ゴム製のカーディガンが軽いうえに水を通さないという点を称賛する一方で、「自由な発汗を阻害する」(Rengade 1887: 514) という理由からそれを非難していた。医者だけでなくブルジョア階級全体が、ゴム製の帽子をかぶることで卒中が起こったり、ゴム製のチョッキやコルセットを着用することで肺鬱血が生じたりする可能性について案じていた (註 26)。

同時期にイギリスでは、医師のグスタフ・イエーガーが衛生羊毛組織の運動を展開していたが、そこでは特にコルセットが問題とされた。また、合理服協会はボーンを使わないコルセットを推奨した。いずれの場合も、身体のかたちを無理に変えないようなファッションであった (Cunningham 2003: 67-70)。ゴム製造業者たちは「汗と空気は通すけれども水は通さないような衛生的な生地」(Rapport du Jury 1844: 710) を作るために、さまざまに工夫を凝らした (註 27)。この問題に対する解決策は、複雑なものであった。ラティエ&ギバル社はゴム糸とリネン糸を重ね合わせ、ハッチンソン社とグッドイヤー社は衣服に極小の管を何本か通した (Picard 1906)。1870 年代以降は生理学の研究が進展し、体操への熱が高まった——これは男性のみのことだが——ことから、ゴム製衣類に対する非難の声が高まった。評論誌『ピクチャレスク誌 Les Magasin pittoresque』は、その 20 年前にゴムを賛美していたにもかかわらず、1873 年に次のように書いた。「皮膚は一年を通して蒸気を発しているものの、普段私たちはその事実に気づくことがない (中略)。この蒸気は、私たちが健康を保つために必要である。そして、このように考えるだけで、ゴム製の衣服を一掃する理由としては十分である (中略)。ゴム靴を履くとすぐに足が蒸れたり、ゴム製のカーディガンを羽織ると汗が出てきたりするの、以上の理由によるものである。」(註 28)

ゴムが大きな成功を収めた理由には、それが人々の身体や動作を形作ることができるという点にあった。実際のところ、医学理論と身体の社会的表象にはいくつもの側面があった。新ヒポクラテス主義だけでなく、機械論的な身体観も存在していた。19 世紀前半の広

告や特許を見ると、この時期に数多くの機械工や技術者が衣類製品の生産に携わっていたことが分かる。彼らの考えは、衣類に影響を残した。折りたたみ可能な帽子（ギブスやオペラハット）や傘、金属製のコルセット芯やアイレット（鳩目）、バスクのついたコルセットがその例である。このような観点からすると、ゴムは快適さと整形外科的な利益という相容れない目的に寄与するものであった。19世紀中頃には、「快適である」ことが中心的な思想となった。この英語の語彙と、その思想に向けた新たな関心は、産業界にも持ちこまれた。家具から地球上の環境まで、あらゆるものが「快適である」と表現された。また、「快適である」という語は、人間——身体と精神——と商品のあいだに新たな関係を生み出した。身体が「快適である」状態とは、リラックスしている時であり、麻酔にかかっている時でもある（Charpy 2010; Giedion 1948）。医療の分野では、ゴムは、水や空気で膨らむ袋やクッションとかたちで瞬く間に用いられるようになった。このクッションは、手足にかかる圧力を軽減したり患者の頭部を休ませたりすることによって、家庭内や病院での患者の身体をサポートするのに用いられていたようである（註29）。これにつづいて、膨張式のクッションは手足を骨折した患者や、開放創を負った患者にも用いられるようになった。このクッションのおかげで、患者は身体を休めて、回復に向かうことができた。鬱病患者は、身体を抱えこむようにして作られたゴム製の安楽椅子に座ることで、気分を落ち着いた。1850年代初頭になるとウォーターベッドやエアベッドは、骨折患者や過敏症を抱えた患者に対して麻酔薬のようなはたらきをした（註30）。過敏症患者やヒステリー性の女性の身体は、くつろぎを与えられることによって治療を受け入れることができるようになった。身体がくつろぐことができるのは、自らの重みを支える必要がなくなり、静寂の状態に置かれたときであった。アパート内の家具には、ゴム製の詰め物がされた。1850年代には、ゴム製の枕と椅子が信じられないほど流行した。このようにしてゴムは、くつろぐための素晴らしい素材となった。そしてその理由は、ゴムが身体を包み込み、特に大都市部に住む神経を病んだ人々に安らぎを与えたことにあった（註31）。家庭内でのくつろぎと静寂が詰め物のかたちをとったように、ゴム製の詰め物をされた安楽椅子は完全なるくつろぎの表れであったのだ。

衣装棚のなかのものでいえば、ガードル、ベルト、ストッキング、靴下が——すべてゴム製で——身体を包み込んでいた。例えば、フランス革命後のフランス、あるいはイギリスやアメリカでズボンが普及すると、ズボンを吊るすサスペンダーが必須になった。しかし1840年代以降、衛生学者たちが、19世紀前半から使用されていた金属製のばねのサスペンダーを非難するようになった。身体のかたちを崩し、骨と筋肉の成長を妨げる、というのがその理由であった。ゴム糸を使ったサスペンダーは快適で衛生的とされていたのだが、その理由は、ほかの素材にはないゴムの弾力性のおかげで、それを装着していても自由に動いたり自然に成長したりすることができるという点にあった（註32）。

同時期にブルジョア的な西洋社会では、人々のからだのラインを作り直し、身体の動きを限定するような衣類が求められていた。医学上の配慮をしつつ美しさの規範にも従いながら、ゴム製ベルトは男性と女性の双方のからだのラインを作り直した(註33)。数多くの広告が男性あるいは女性がルーブル美術館や大英博物館に置かれた古代の彫像と対面する姿を描いた(註34)。臓器が脱出したり胃や乳房が垂れ下がったりした場合の処置として、ゴム製ベルト——従来使われていた革製や金属製のベルトよりは快適だった——が、基準から外れた身体を支えるのに用いられた。また、膨張式のゴム製装置は、人々の外観を変えた。膨らませたゴム製の乳房が慎み深いドレスの隙間を満たし、1850年代中頃に着用されていたクリノリンドレスには、ドレスに広がりをもたせるために膨張式のゴム管が通された(註35)。

ミシェル・フーコー(1975)が強調したように、19世紀とは人々の外観のみならず立ち振る舞いに対しても強迫観念が抱かれた時代であった。矛盾するようなことだが、弾力のある素材は整形外科でも使われる素材になった。ふんだんにゴムを使ったコルセットが、そのもっともよい例である。コルセットが根強い支持を得るのは1870年代以降のことだが(Steele 2001)、その理由はコルセットが人々のからだのラインを作り直し、立ち振る舞いを規定することができる、という点にあった。当時の人々は、18世紀の生活様式を夢見ていたのである。ブルジョア女性はコルセットを着用することで姿勢よく立つことができた——それは衛生学者と道徳家、そして仕立屋が等しく抱いていた強迫観念からだだった。コルセットを着けた女性たちはぎこちなく動くわけではなく、苦勞して動かそうとすることもなかった。ゴム糸とゴム製レースのおかげで女性の立ち振る舞いと衛生学が結びつけられ、彼女たちは呼吸できるようになった(註36)。1859年に刊行された『商業・航海事典 Dictionnaire du commerce et de la navigation』は、「ヘルニア用ベルトと整形外科用器具」の項目で次のように記している。「フランスの場合、パリが独占しているこの産業は、当初考えられていたよりもずっと重要である。この産業では、一方で、ヘルニア用ベルトや下腹部用ベルト、弾性ストッキング、腕用の補助具、局部サポーター、そしてペッサリーや消息子、哺乳瓶の乳首などのゴム製器具が製造されている。他方で、姿勢や手足の歪みを矯正するためのあらゆる種類の器具や松葉杖、義肢なども作られている」(註37)。整形外科科学にとってゴムは、汗によって変質せず、洗濯が容易で、生地が丈夫なうえに、身体を傷つけない素材であった。整形外科の目的が、立ち振る舞いや優美さに関する人々の考えと呼応したのである(Figs. 4)。

優雅なビーチから歩道へ——社会的に格下げされるゴム生地

ファッションのサイクルが短いのは当然である。それはカゲロウのように短命だが、それぞれに特徴をもっている(Lipovetsky 1994[1987]; Perrot 1981)。衣類が産業化時代に突入すると、

ファッションとそこで用いられるようになった新しい素材は、模倣され差異化されるようになった (Verley 1997)。王室内のファッション現象とは異なり、衣服産業における模様と差異化の現象は、社会階級の違いを越えたすべての人々にかかわるものだった。とりわけ重要だったのが、コストの問題であった。1840年代末から1850年代中頃にかけて、流行に敏感な人々はゴム製の衣服に身を包むようになったのだが、それは、ゴム製の衣服の価格が高く、とても目新しかったからであった。ゴムは品がよく高貴な素材である、というわけだった。ブルジョア階級は黒いゴムで作られた服喪用の装身具を身につけ、先祖の写真はゴム製の写真立てに飾られた (註38)。1851年の万国博覧会についてある報告者は、次のように書いている。「アメリカでは皮革に代わってゴムが用いられている (中略)、ゴム靴を履いているのが社会の上流階級の人々だ、ということである。(中略) ゴム糸で編まれた靴を履いた人が (中略) 応接間に現れると、それはそこにあるすべての靴のなかでももっとも優雅なものだった」 (Gourlier 1855: 28-34)。ゴム製の衣類と靴を身につけた人の姿は、パリのラ・ペ通りにあるパレ・ロワイヤルとギャルリー・ヴィヴィエヌ付近、ロンドンのウェスト・エンド、そしてニューヨークのカナル通りとブロードウェイ通りといった、優雅な都市空間で見られた (註39)。上流社会の人々はゴム製衣類を身につけることによって、みずから有閑階級に属していることを示したのである。

しかし1850年代末以降、ゴム産業の夢は現実のものとなった。海上輸送が増加し、加硫技術が産業として管理されるとともに、ゴムの価格は低下した。ジャワ島とマレーシアという従来の生産地だけでなく、ブラジルやペルー、そしてフランスの場合はフランス領ギアナという従来の生産地が加わったことで貿易が強化された結果、ゴムがより広い範囲な地域から手に入るようになった。例えば、1830年に16トンだったパリへのゴムの輸入量は、1855年には1,000トンに、1889年には12,000トンに増えた (註40)。1900年頃のフランスはみずから膨大な量のゴムを生産していたにもかかわらず、129トンのゴム生地と14トンのゴム製衣服、そして296トンのゴム靴を輸入していた。ロンドンの万国博覧会について書いたミシェル・シュバリエによると、1862年以降、「衣服産業において、ゴムには数々の用途があった。なかでもゴム製の雨具は防水性に優れて軽量であり、手ごろな価格で手に入った」 (註41)。同時期には、セルロイド製の襟やカフスが大きな成功を収めていた。

新たな時代の到来であった。紙やセルロイドとともに、ゴムは大衆的で工業生産された衣類を象徴する素材となった。ここで重要なのは、フランスとイギリスにおいてゴム製衣類が新たな名称を得たことである。つまり、「アメリカ製下着 *linge américain*」と呼ばれるようになったのだ。白色のゴムやセルロイドでできた紐や襟、カフスは、貧しい事務職員や一般の労働者が晴れ着に身を包むときに使用するものとなった。それらの製品が「アメリカ製」と名付けられた理由のひとつは、アメリカ人がそれらを多数消費した点にあったのだが、それとは別に、当時ヨーロッパで「アメリカ製」という語が「民主的で、歴史的

な起源をもたない、安価で品のない商品」を意味していたという理由もあった。1855年以降、ゴム靴はたとえヨーロッパで生産された場合でも「アメリカ製の靴」と呼ばれるようになった(註42)。19世紀が終わりを迎える頃には、日常生活のなかで用いられるゴム製衣類は、既製品産業によってファッションの民主化と標準化がすすめられたことの証しとなっていた(註43)。別の事例から同じ現象を観察したのが、パトリック・ヴェルレイ(1997)である。彼によると、インド産のショールは19世紀初めに熱狂を巻き起こしたものの、ショール生産が工業化され、庶民の手にもわたるようになった1830年代には下火になった。小ブルジョア階級や管理人のような人々までショールを身に付けはじめたことで、ブルジョア階級はそれを拒むようになったのだ。ゴムの流行についても、ショールの場合と同じ失墜を確認することができる。ゴム製品が工業化され低価格で提供されるようになったことで、ゴム製の靴やコートは大衆の手に渡るようになった。その結果、ゴムは差異化の力を失ったのである。

ゴム製衣類が社会から消滅したのには、もうひとつの理由があった。つまり、洗濯のしやすさが怠慢の兆候とされたのである。上流社会に属する者は、男性であればキンポウゲのような薄黄色の手袋やエナメル革の靴、黒色の生地など、女性であれば白色のドレスなど、汚れのつく衣類を身につけることができるものだとされた——それらが汚れば、家事労働を担う数多くの召使いがきれいにすればいいのだった。そして、洗濯しやすく長持ちするゴムの存在は、ブルジョア階級による社会的差異化の戦略を脅かした。ゴムは次第に、大衆向けの衣服や労働時の服装としてのみ着るのがふさわしいとされるようになった。

上流社会では、スポーツをする男性や地方の女性のみがゴムを用いていた。都市部の旅行者が履いていた繊細な作りのゴム靴は、最初アメリカで、次いで産業化を迎えたヨーロッパでも、裕福な小作農用のゴムブーツ(ウェリントンブーツ)となった。百貨店が発行していたカタログ——特に1880年代末にアメリカのシアーズ社やフランスのマニユフランス社のもの——は、ゴム製品の地方への普及に一役買った。例えば、ハッチンソン社が国立軟質ゴム会社としてフランスで成功した理由のひとつは、同社が地方でゴム製の靴やブーツの小売りに乗り出したことにあった(Figs. 5)。人々の集合的想像力のなかで、ゴムと田舎のぬかるみが結びつけられた。他方で、このとき都市の流行空間では、ゴム製の衣服が異質なものとなっていた。

これと同じ時期に、ゴムが防水性を備えていたことから、ゴムは種々の職業で制服や作業着を作るのに利用された。化学工業、屠畜場、魚屋といった仕事場では、労働者がゴム製の手袋やエプロンを着用した。他方でパリやロンドン、あるいはニューヨークの優雅な街路では、ゴム素材は馬車の御者や機械工を保護するのに用いられた(Hudson 1992; Thompson 1996[1968])。こうしてゴム製の衣服と靴は、青色の綿や木靴と同じく、社会集団の想像力のなかで労働の世界を成り立たせるもののひとつとなったのだ。

遂に、1890年頃に自転車と自動車のタイヤにゴムが使用されたことで、ゴムのイメージは低級なものになった。田舎の泥道やアスファルト道路を走るのに使用される工業用素材が、上流社会で衣服として引き続き着用されるはずがなかった。雨具やブーツ、傘の販売業者は、もはやゴム製品をあつかっていないと広告にはっきりと書いた。嗅覚の感性が変化したのは、深いレベルで転換が進んでいることの表れであった。1860年代からは、以前は気にされていなかったゴムの匂いが不快とされるようになった (Corbin 1986) (註44)。社会的差異化の力は細部に宿っていた。素材や商品の匂いを嗅いだり触ったりするのは、それらを評価するための方法であった。

ゴムの使用が技術的な面でも職業面でも増加し、民衆の手に広まったことによって、ゴムは都市のブルジョア階級の衣装棚から外へと出た。地方での衣服や下着としてのみ使われ続けたのである。

医療から性的欲望まで——日常生活における技術から禁じられた快樂まで

ある物質がどのように消費されたり使用されたりするのか、あるいは成功するのか否かを決めるのは、その物質に関する社会的想像力である。ゴムは衣料分野から周辺の多くの分野にも応用されたのだが、中でも医療分野への応用は積極的であった。弾力があり衛生的で防水性を備えているというゴムの性質は、医療にとって、とりわけ家庭医療にとってぴったりだった。家庭医療とは1830年代から成長をつづけ活性化していた経済分野であった。グッタペルカを最初に製造したのがイギリス人の外科医であったという事実は、驚くに当たらない (註45)。ゴムの製造業者たちは1840年以降、整形外科用のコルセットだけではなく外科手術用の道具や帯具も開発するようになった。フランス、イギリス、アメリカの大規模なゴム製品工場は、医療用ゴム製品の生産をこぞって開始した。時期を同じくして、多数の工場が医療用ゴム製品の生産に特化するようになった。当時印刷された何百種類ものカタログとチラシ広告を見ると、医療分野へのゴムの応用例が数えきれないほどあったことが分かる (註46)。例をいくつか挙げると、乳母のためのゴム製のおしゃぶり、哺乳瓶の乳首、浣腸器、管、痰壺などがあつた。ゴム生産を独占していた衣服産業に近い健康管理や衛生の分野では、ゴムはとても重要だった。ある健康管理製品の観測者は、1859年に次のように書いている。「近年加硫ゴムが登場したことによって、人間の身体を治療し、痛みを抑える方法が格段に増えた」 (註47)。ゴム製品はクロム鋼とともに、家庭医療の場や病院で用いられるようになったのである。

ゼラチンやゴム自体を加える新しい鑄造と造型の技術が発明されたことによって、ゴムは乳房や鼻、脚などを含む義肢の素材にもなった。さらに染料を使えば、肉体のさまざまな色合いを模倣することができた。フランス、イギリス、そしてアメリカで戦争と手術によって数多くの人々の四肢が切断されたことから、当時義肢は利益の上がる市場であった

(註 48)。例えば、ブロードウェイ通りに設立されたマークス社の工場からは、世界中に多量の商品が供給されていた。同社の広告によると、そこは「世界でも最大の義肢工場」であり、「ゴム製の手と脚の生産、および特許を取得した方法」に特徴があった。

それと同時に、美学と医学の双方から影響を受けていたゴム製のコルセットと帯具は、ヘルニアを予防するとともに、不健康な体形を適合させるものだった(註 49)。

ゴムが下着として着用されるにつれて、ゴムははっきりと性に関わる事柄となった。一方でゴムは、1840 年代以降、男女の性器を支えたり保護したりする局部サポーターや帯具の素材として利用されていた(註 50)。ゴムが使用されたのは、ヘルニアはもちろん男性でも女性でも、特に脱出症を予防するためであった。衛生パッド用のベルトやゴム製の手袋、ゴムのカバー付きの金属鏡が当時開発されたことを想起するならば、ゴムが婦人科に適した素材とされた理由は明らかである。19 世紀の道徳と医学に関する言説からは人々が男女の生殖器に対する恐れを抱きながら、同時に魅了されていたことが分かる(Kempf and Aron 1978)。他方で、19 世紀は人々が絶えず自慰に耽っていた時代であったことから、ゴムは若い男女が装着する貞操帯の素材として完璧だとされた。ゴム製の器具は——生殖に結びつかない浪費をさせないように——振る舞いとほとぼしりを管理していたのだ(Corbin 2007)(註 51)。例えば、整形外科専門医のベルジェロンは、パリのサン・ドニ通りで「バラ冠の少女のコルセット Au Corset de la Rosière」(「純潔な少女のコルセット」、あるいは「高潔な処女のコルセット」という意)の看板を出して、あらゆる種類のゴム製のコルセットやベルトを販売していた。それらの商品は、特に「男性あるいは女性の自慰行為を防ぐ」ためのものだった(註 52)。1867 年には、医師に医療製品を売っていたシャリエール社が、「3 歳から 10 歳までの少年、および 10 歳から 20 歳までの少女」を対象とした数々の商品を販売した(註 53)。それらの商品は、50 年後も帯具をあつかう業者や整形外科医のカタログに掲載されていた。

ゴムが快楽を与えたり享受したりするために使用されたのは、驚くに当たらない。1880 年代以降ゴムは性愛の道具となり、妊娠の可能性のないセックスを可能にする避妊具として用いられたのである。特にフランスの主な避妊器具であったビデは、1850 年頃にフランスとイギリスで、寝室内にゴム製のものが置かれるようになった(註 54)。また、ゴム製のコンドームは男性用、女性用ともに大きな成功を収めた(Sohn 1996: 825-6)。例えばフランスの場合、1877 年頃には 1 日 20,000 個の膨張式のゴム製コンドームが生産されていた。1880 年代には、有機材料に代わってゴムがコンドームなどのゴム製医療製品がフルタイムで生産されていた(註 55)。ゴム製コンドームは自由な性的快楽を支持するものとして、使うのが恥ずかしいとされたことから、郵送の際には煙草や葉巻の箱に入れられた(註 56)。しかし、同時に、医師たちは梅毒などの性病への懸念から、人々にコンドームを使用するよう促さざるをえなかった(註 57)。このようにして、貞操帯を装着して成長した全世代の青少年たちは、ゴムが与えてくれる快楽に浸ったのである。ゴムの触感と匂いはセックスを意味するようになった。

こうしてゴムは性具の素材となった。1880年代末以降、ゴム製品の製造業者と小売業者はそれらの商品をカタログで販売するようになったのだが、その際彼らはコンドームを売る時よりも慎重な姿勢をとった。そのために、性具の使用に関する資料を見つけるのは容易ではない。性具は性的な点からも節制の点からも恥ずべきとされていたので、公的に収集された資料に性具のカタログはほとんど収められていない。とはいえ、フランス——少なくとも大衆の想像力のなかではこの種の商品の中心地とされていた国である——で行われた裁判の資料から、1890年から1900年頃の状況をうかがい知ることができる。フォーブール・サン・マルタン通りにあったクラヴェリの店に踏み込んだ警察は、陳列棚に数々の商品が——ラベルの貼られていない状態で——並べているのを発見した。商品のなかには、デイルド（「日本製指ぬき *doigtiers japonais*、マダガスカル製指ぬき *doigtiers malgaches*、……」）や「ヴィーナスの錨」（ペニスを支えるためのもの）などがあった。また、店内からは数百冊に及ぶカタログが見つかった。これらの商品が社会にどれだけ広まっていたのかを評価するのは困難である。ただし、クラヴェリは猥褻罪に問われた裁判の席で、帯具をあつかうすべての店が同種の商品を置いていると証言している。快楽追求や生殖補助を目的とした商品があるかどうかを見定めるよう求められた専門家は、これらのゴム製品が「欲情を掻き立てる」と意見を述べている（註58）。これらの商品が非道徳的で生殖と結びつかない快楽を得るために使用されているのは、明らかだった。これらが女性による快楽追求を目的としたものであったことから、人々はいつそう強い不快感を覚え、憂慮した（Kempf and Aron 1978）。以上を念頭に置けば、公共空間と優雅な社会におけるゴム製品の流行の終焉についてより深く理解することができる。

ゴムが医療の分野で、次いで快楽として成功を収めたことは、人々の社会的想像力に影響をもたらした。ゴムの匂いと触感、そしてゴムへの接触は、性的かつ悪魔的だとされるようになった、フェティシストは他意のないマッキントッシュ社製の傘や優雅なゴムボートに欲望を覚えた（Steele 1997）。1900年頃には、貞操帯を装着していた世代の人々が、若者の生殖と結びつかない快楽を防止するための医療器具である貞操帯をパリの売春宿で性具として使っていた（Fig. 6）。

ゴムが第二の皮膚としてひそかに愛されたことによって、ゴムは公共の社会的生活の中で居場所を失ってしまった。この時期以降、ゴムは機能的な作業着として、または肉体労働の環境でのみ使用を認められた。ブルジョア階級では弾力性のコルセットなどの下着としてのみ使用されていたものの、1900年頃にはゴムを全く使わない下着の広告が現れていた。そして、ゴム製の造花——悪魔の花？——が女性の帽子を飾るようになった。

結論

ファッションについて素材の側面から考察するのは、ファッション史に見られる現象を

技術的、経済的な次元から考える一つの方法である。あるものに対する熱狂が広がり、やがて幻滅と失墜が訪れる——さらには、しばしば忘れ去られる——というファッションのメカニズムは、社会的な過程である。ただし、この過程に関わっているのは人々の嗜好や目新しさだけではない。社会的感性が社会的、文化的な想像力を形作り、そしてこの想像力がファッションという現象を生み出す。衣類に用いられていた素材について調査することによって、匂いと触感に対する社会の感性や、衛生や振る舞いに対する感性、そして社会階級ごとに形づくられる身体の肉体的側面に対する感性を明るみに出すことができる。また、素材の歴史を調査すれば、「物の体系」(Baudrillard 1996[1968])における物質文化での考察を含む様々な素材は、人々が流行に熱狂し、その後離れていく過程に影響を与えた。このことを念頭に置けば、19世紀の産業化社会における衣類についての歴史を、社会と文化、産業の側面から記すことができるだろう。

ゴムという新しい素材に人々が熱狂し、数えきれないほどの種類の製品に応用されるようになると、ゴムには品がないとされるようになった。ひとつの理由はゴムが安価だったことにあるが、それだけでなく、ゴムの機能的な性質が差異化という社会的メカニズムを脅かしたのも、その理由であった。他方で、あるいはタイヤとして成功を収めたことで、ゴムはぬかるみや砂埃と関連付けられた。その一方で、ゴムを素材とした家庭医療用の製品の生産が増えると、ゴムは身体にとって身近な素材となった。1870年代にゴム製コンドームが登場したことで、ゴムには性的な意味合いが含まれた。悪魔的とされたゴムは人々の快楽を刺激し、19世紀末にはこの快楽を「恥ずべきものとした」。ゴム製品に続いて20世紀にはビニール製とナイロン製の衣類の時代がやってきたが、そこにも身体文化、社会的差異化、そして性愛に関する想像力と実践の歴史が含まれていた。ゴムが使用され、受容され、熱狂を受け、やがて見限られる過程には、社会階級の違いや革 (Tamagne 2008)、鋼、リネン、そして綿の使用も関わっていた。また、その過程には合成素材や染料も登場した。このようなゴムの歴史が示しているように、素材は商業史とスタイルの歴史にとって関連性のある対象であるばかりでなく、ファッションと衣服、身体に関する社会的慣習を明らかにする手がかりでもあるのだ。

(翻訳：京都服飾文化研究財団)

〈註〉

1. “Courrier de la mode,” *L’Artiste*, 1858, Vol. 5, p. 48.
2. “Caoutchouc” in Picard (1906).
3. 以下を参照。“Confection” in *Dictionnaire du commerce* (1861).
4. 衣類製造業が作った既製服や品物が中産階級の支持を得るのは、百貨店が登場した1850年代以降のことである。
5. 以下を参照。“India-rubber” in Homans (1852).
6. 例として以下を参照。“Washington D.C., October 17, 1839,” *Army and Navy Chronicle*, volume VIII, 1839,

p. 249.

7. この熱狂の一種は技術関係の書籍や、大衆に新しい技術を紹介した書籍でよく見られる。“Histoire d’une balle élastique: Monographie du caoutchouc” (“Story of an Elastic Ball: Rubber’s Monograph”) in *Musée des familles, lectures du soir, XXV^e année*, 1857-8, pp. 209-15. フランスにおけるゴム関連の膨大な特許については以下を参照。 *Description des machines* (1856-66) “Caoutchouc et gutta-percha.” アメリカについては以下を参照。 *Annual Report of Commissioner of Patents*, Washington, Beverly Tucker, printer to the Senate, 1844-1870. 様々な応用例については以下を参照。 Chapter V, “Applications” in *Caoutchouc et Gutta-Percha* (1852) and Desormeaux (1854).
8. 例えば、加硫処置以前、フランスは 1830 年代に 15 トンを輸入したが、1855 年には 1000 トンになった (*Dictionnaire du commerce* 1861)。アメリカにおいても同様の増加をたどった。以下を参照。“India-rubber” and “Caoutchouc” in Homans and Homans (1852; see also the 1859 edition).
9. パリ周辺にはいくつもの製造業者が集まっていた。 *Chambre de Commerce de Paris, Statistique de l’industrie à Paris résultant de l’enquête faite par la Chambre de Commerce pour les années 1847-1848* (Paris, 1851), “Caoutchouc (fabricants d’ouvrages en),” 503-4. 報告者は以下のように記述している。「第 8 グループ。化学産業と製陶産業」「二つの産業が輸出について注目し値する…香水製造業…そしてゴム産業」。ゴム産業については、総製造量の 31 パーセントが輸出された。(p. XLVI)。『*Dictionnaire du commerce et des marchandises*』(1859) には、345 トン以上もの輸出入用ゴム製品を挙げている。
10. この種の熱狂は工業分野の文献や一般向けの科学書によく見られる。下記を参照。“Histoire d’une balle élastique: Monographie du caoutchouc” in *Musée des familles, lectures du soir*, 1857-8, pp. 209-15. 加硫ゴムに関する無数の実用例は、1850 年代の特許記録のあらゆるところに見られる。以下を参照。 Archives de l’INPI, rubber section and “Caoutchouc et gutta-percha” in *Description des machines* (1855-56)。アメリカの事例については以下を参照。 *Annual Report of Commissioner of Patents* (Washington, DC, 1844-1870)。多種多様な実用例については以下を参照。 Chapter V, “Applications” in *Caoutchouc et gutta-percha* (1852), Chapter V and Desormeaux (1854).
11. “Caoutchouc” in *Dictionnaire universel* (1851).
12. 1850 年代を通じて、家具や衣服、軍隊用の伸縮性のある織物に関する多数の特許を目にすることができる。
13. 1840 年代から 19 世紀末までのゴム工場のカタログについては下記を参照。 *Bibliothèque historique de la Ville de Paris, série Actualités 120 and advertisements collection* in New York Public Library (“rubber, caoutchouc, gutta-percha” and “shoe”).
アメリカでのゴム靴製造の歴史については、以下を参照。 *New York Times*, January 1, 1866.
14. 以下を参照。 Soeligkann *et al.* (1896), Clouth (1908), and D. Van Nostrand Company, New York, 1903。また、下記も参照。 patent no. 658, 1853 : 「パリ市ジョゼ・ドータン通り 51 番地、国立軟質ゴム会社経営者ハッチソン氏、代理人バッセ氏により、長靴および短靴の製造に関する実用新案に関する 15 年の発明特許の請願が 1853 年 6 月 27 日、セーヌ県事務局に申請された」
15. “Courrier de la mode,” *L’Artiste*, 1858, Vol. 5, p. 48. 以下も参照。 Dupin (1862: 10)
16. “Chaussures” in *Dictionnaire du commerce et de la navigation* (1861) and “Shoes” in Homans and Homans (1858).
17. 例として下記を参照。 Patent, Lejeune, August 4, 1849: “Application du caoutchouc à la peluche” and “Specification of the patent to Francis Nalder, of Cheapside, in the City of London, Warehouseman, for Improvements in the Manufacture of gloves, sealed October 8, 1846” in Underwood (1847: 287 et seq).
18. 例として下記を参照。 “Caoutchouc et gutta-percha” in Barreswil and Girard (1861: 401-40).
19. Jules Michelet, *Le Peuple*, 1846 : 「細工しにくくて美しくもない木綿の織物に、多くの輝かしい変形を毎日加え、ついどうして加工されたものをいたる所に広め、貧しい者の手に届くようにするためには、知識と技術の結びついた努力が必要だったのである。かつてすべての女は青か黒の服を着ていたが、洗ったらぼろぼろになるのを恐れて、十年間も洗濯せずに身に着けていたものである。今日では貧しい労働者だろうと、一日働いて妻に花模様の服をまとわせることができる。民衆の女はみんな、ついこの間まで喪服を

着ていたみたいだったのに、今や様々な色彩のまばゆい虹を、私たちが散歩するときに見せてくれるのである。こういった変化は、取るに足らないことと思われるかもしれないが、巨大な影響範囲を持っている。それは物質的改善ではなく、人間が自分たちのことを判断し合うときの基準となる外面や外見において、民衆が進歩したということなのである。」(ジュール・ミシュレ『民衆』 大野一道訳 みすず書房 1977年 65頁)

20. 下記を参照。“Caoutchouc,” *Dictionnaire du commerce et des marchandises* (1859) : 「紐やベルト、靴下止めの製造において、一言でいえば、体の表面に直接触れ、結果として汗にさらされるような衣服の部分にゴムを使用した織物を用いるのは、疑いなく好ましいことである」。1850年代から70年代の間、「衛生的な『腕の下』」や「ドレス・シールド」のための特許がたくさん存在する。また、フランス、イギリス、アメリカでは広告も数多く存在する。(例として下記を参照。Advertisements in *Chicago City Directory* 1855)。20世紀初頭までに、この種のアイテムは一般的なものになった。下記を参照。“Rubber Goods,” “Dress Shields” in *Department Store Merchandise Manuals* (1917: 100).
21. “Produits fabriqués par M. Charles Guibal et C^{ie}. La fabrication du caoutchouc,” *Le Génie industriel: revue des inventions française et étrangères*, Armengaud frères, Paris, 1855, p. 129.
22. 以下を参照。Advertisements of the years 1870-1900 kept in New York Public Library.
23. Rubber and celluloid advertisements (c. 1880), New York Public Library.
24. 以下の目録を参照。Bibliothèque historique de la Ville de Paris, série Actualités 120.
25. 以下を参照。Catalogue de la la maison Champion company’s catalog, Bagnolet [close to Paris], Bibliothèque historique de la Ville de Paris, 1833-45.
26. *Album de l’Exposition de 1855*, L’Abeille impériale, Paris, 1855. 「批判の第一として、何よりも帽子に関連するゴム製の衣料品を挙げなくてはいけない。ゴム製の帽子を使って衛生を保つことは不可能である」。帽子と病気の発作や健康へのダメージについては、以下を参照。de Fontenelle (1830) and Fonville (1834)。19世紀後半までに、帽子が引き起こす病気の発作に関する考察を目にすることができる。Becquerel and Beaugrand (1864: 444).
27. 以下を参照。Rubber companys’ advertisements in the *Harper’s Weekly* during the year 1854.
28. *Le Magasin pittoresque*, Paris, 1873, p. 72.
29. 病院や家庭における水や空気で膨らむベッドの使用については下記を参照。 *Gazette hebdomadaire de médecine et de chirurgie*, September 14, 1855, p. 667 and Napoléon Joseph Charles Paul Bonaparte, *Exposition universelle de 1855: rapport du jury mixte international* (Paris, 1856), “XII4 classe. Hygiène, pharmacie, médecine et chirurgie.”
30. アーノット医師のベッドに加え、ゴムと弾性スチールの使用に関する二十に近い特許を見つけることができる。医療器具製造業者のカタログでは、この種の寝椅子に大きなページを割いている。例として以下を参照。The Galante factory’s catalogs “Caoutchouc vulcanisé: Catalogue des appareils et instruments de médecine et de chirurgie” (“Vulcanised Rubber: Catalog of Medical and Surgical Devices and Instruments”), 1853, published in French, English, and Spanish (BHVP, série Actualités 120).
31. Advertisement of Arnott’s water bed produces by Smith & Son, London, 253 Tottenham Court Road, 1855 (Bibliothèque historique de la Ville de Paris and New York Public Library) and Napoléon Joseph Charles Paul Bonaparte, *Exposition universelle de 1855: rapport du jury mixte international*, Imprimerie impériale, Paris, 1856, “XII° classe. Hygiène, pharmacie, médecine et chirurgie,” about inflatable mattresses.
32. 以下を参照。“Bretelles” in Guillaumin (1841: 360).
33. Bibliothèque historique de la Ville de Paris, série Actualités 120 and New York Public Library, Ephemera Collection.
34. 1890年頃のシャース社のカタログを参照。「オリンピック・ベルト：上半身の美、美しい装いに必要不可欠、肥満の駆逐、腸下垂・遊走腎・虫垂炎対策、胃や肝臓の膨張対策に」。Bibliothèque historique de la Ville de Paris.
35. “Crinoline,” *Musée des Familles*, September 1856.

36. コルセット製造業におけるゴムの使用については以下を参照。Picard (1906).
37. 以下を参照。“Bandaged herniaied et appareils d’orthopédie” in *Dictionnaire du commerce et des marchaidises* (1859).
38. 以下を参照。Israel Corse papers (1840-1937) and Miller family papers (c. 1854-1931). in archives of the New York Hsitorial Society.
39. *Annuaire Bottin-Didot du commerce, London Directories, and Trow’s and Trow’s and Fellow’s Directories* (New York Cities). 例として以下を参照。Advertisement in Harper’s Weekly, August 1, 1857, “J. B. Miller & Co. Ladies going into the country wishing their supply of Shoes, can find Gaiter Boots from 12s. to 20s.; Ladies’ Slippers, Tyes, and Toiket Slips, from 6s. upward; India Rubber Shoes and Gloves, with Boys’, Misses’ and Childresn’s Boots and Shoes of all kinds and prices, no.134 Canal Street [New York City].”
40. 以下を参照。 *Dictionnaire du commerce et de la navigation* (1859), “Caoutchiouc” and *Dictionnaire du commerce et de la navigation* (1901), “Caoutchouc.”
41. 以下を参照。“L’industrie moderne, ses progress et les conditions de sa puissance” in Chevalier (1862: 11).
42. 以下を参照。“Grand choix de chaussures américaines” (“Large Choice of American Shoes”), Guibal & Lebigre rubber company’s advertisement, Rubber clothing, coats, and shoes, 142 rue de Rivoli, Paris.
43. セルロイドの衣服と「アメリカ製下着」については以下を参照。Vibert (1895). 「もっとも幸福なセルロイドの応用法の一つとして挙げられるのは、疑うことなく、パリでも製造されているアメリカ製下着です。水槽（ショーウィンドウ）で目にする襟やカフスのすべてはセルロイド製です。それらは丈夫で、毎日洗えて、言うまでもなく、紙製下着を最終的に死へと追いやったのです」
44. 嗅覚と社会的な区別の例について以下を挙げる。「春到来！傘とゴム靴の悪臭よ、さらば！」 Le Magasin pittoresque, 1862, p. 246.
45. イギリス人外科医モンゴメリーとガタパーチャについては以下を参照。“Chirurgie spésciale” in *Dictionnaire universel théorique* (1859). また、19世紀半ばの医療への応用例については以下を参照。Delabarre (1852) and *L’Abeille médicale, revue clinique française et étrangère*, February 15, 1853. 医学や外科でのゴム使用の一覧は以下を参照。Gabriel (1853: 91).
46. 約500冊のカタログがパリ市歴史図書館に所蔵されている。
47. 以下を参照。“Instruments chirurgicaux” in *Dictionnaire du commerce et des marchandises* (1859).
48. 以下を参照。advertisements in New York Public Library. 特に次を参照のこと。A. A. Marks, 701 Broadway (“The largest artificial limb manufactory in the world”) and advertisements and catalogs of Lebigre factory and Claverie factory (Bibliothèque historique de la Ville de Paris).
49. 以下を参照。Advertisements in the *Harper’s Weekly* and section “Orthopaedic” in série Actualité 120, Bibliothèque historique de la Ville de Paris.
50. 例として以下を参照。The Galante factory’s catalogs “Caoutchouc vulcanisé: Catalogue des appareils et intruments de médecine et de chirurgie” (“Vulcamized Rubber: Catalog of Medical and Surgical Devices and Instruments”), 1853, published in French, English and Spanish (série Actualités 120, Bibliothèque historique de la Ville de Paris).
51. 妊娠について総合的に扱った19世紀前半の書籍の一例として、以下を参照。Doussin-Dubreil (1839).
52. Bregon’s catalogs, c. 1840, Bibliothèque historique de la Ville de Paris.
53. “Appareil contre l’onanisme” (“Devices against Onanism”), in *Catalogue de la maison Charrière, Robert & Collin successeurs, fournisseurs de la Maison de l’Empereur, fabricants d’instruments et d’appareils de chirurgie de tous modèles, d’appareils d’orthopédie et d’hygiène, bandages herniaires, pulvérisateurs d’eau, chirurgie vétérinaire, histoire naturelle, coutellerie fine, etc.*, Paris, 1867, p. 52.
54. 例として以下を参照。L. Simon’s catalogs of pieces of furniture (1876) and the Sears et Constable & Co’s catalogs during 1880s and 1890s. イギリスに関しては以下を参照。Anonymous, *My Secret Life* (1888).
55. 以下を参照。 *Annuaire Bottin-Didot du Commerce* (Paris, 1886) and *Dictionnaire du commerce et de la navigation* (1901), “Boyaux.”

56. フランスについては、わいせつ罪に関するクラヴリー社の訴訟録を参照。Archives de Paris, D2U6/110, 1896.
57. 以下を参照。Bertherand and Duchesne (1877). 19世紀末については以下を参照。“Boyaux” in Guyot and Raffalovitch (1901).
58. Archives de Paris, D2U6/110, Claverie’s file, 1896.

〈参考文献〉

- Appadurai, A. 1997. *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Barreswil, Charles Louis and Aimé Girard. 1861. *Dictionnaire de chimie industrielle...*, pp. 401-40. Paris: Dezobry, E. Magdeleine et Cie.
- Baudrillard, J. 1996[1968]. *The System of Objects*. London and New York: Verso.
- Becquerel, Alfred and Émile Beaugrand. 1864. *Traité élémentaire d'hygiène privée et publique*. Paris: Asselin.
- Bertherand, Dr É. and Dr Léon Duchesne. 1877. *Des boyaux dits préservatifs, de leur fabrication et de leur influence sur le développement de la maladie vénérienne*. Lyon: Association Typographique imprimerie de Riorot.
- Bourdain, Édmond. 1885. *Manuel du commerce des tissus, vade mecum du marchand de nouveautés*. Paris: J. Hetzel.
- Bourdieu, P. 1984[1979]. *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Breward, C. 1999. *The Hidden Consumer: Masculinities, Fashion and City Life 1860-1914*, Studies in Design and Material Culture. Manchester: Manchester University Press.
- Breward, C. 2004. *Fashioning London: Clothing and the Modern Metropolis*. Oxford and New York: Berg.
- Brewer, J. and F. Trentmann (eds). 2006. *Consuming Cultures, Global Perspectives: Historical Trajectories, Transnational Exchanges*. Oxford and New York: Berg Publishers.
- Brydon, A. and S. Niessen (eds). 1998. *Consuming Fashion: Adorning the Transnational Body*. Oxford and New York: Berg Publishers.
- Caoutchouc and Gutta-Percha. 1852. *Caoutchouc and Gutta-Percha*. London: Society for Promoting Christian Knowledge.
- Charpy, M. 2008. “Forms and Scales of Second-hand Market in the Nineteenth-Century: Case-study of Clothes in Paris.” In L. Fontaine (ed.), *Alternative Exchanges: Second-Hand Circulations from the Sixteenth Century to The Present*. Oxford and New York: Berghahn Publishers.
- Charpy, M. 2010. “Entre orthopédie et repos: la discrète machinerie du confort” in “Le théâtre des objets. Cultures matérielles, dispositifs techniques et phénomènes de modes, Paris, 1830-1914.” PhD dissertation, University of Tours, pp. 187-210.
- Chevalier, Michel, 1862. *Revue des Deux Mondes*, Vol. 42. Paris, Au bureau de la Revue des Deux Mondes.
- Chicago City Directory. 1855. Chicago City Directory and Business Advertiser*. Chicago, IL: Robert Fergus, Book & Job Printer.
- Clouth, Franz. 1908. *Rubber, Gutta-Percha and Balata*. London: Maclaren & Sons.
- Corbin, A. 1986. *The Foul and the Fragrant: Odor and the French Social Imagination*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Corbin, A. 1995[1986]. “The Great Century of Linen.” In *Time, Desire, and Horror: Towards a History of the Senses*. Cambridge, MA: Blackwell.
- Corbin, A. 2007. *L’Harmonie des plaisirs. Les manières de jouir du siècle des Lumières à l’avènement de la sexologie*. Paris: Perrin.
- Corbin, A., G. Vigarelllo and J. J. Courtine. 2006. *Histoire du corps*, Vol. 3. Paris: Le Seuil.

- Cunningham, P. A. 2003. *Reforming Women's Fashion, 1850-1920: Politics, Health, and Art*. Kent, OH: Kent State University Press.
- de Fontenelle, Jean-Sébastien-Eugène Julia. 1830. *Manuel complet des fabricans de chapeaux en tous genres*. Paris: Librairie encyclopédique de Roret.
- Delabarre, Antoine François Adolphe. 1852. *De la Gutta-Percha et de son application aux dentures artificielles en remplacement des plaques métalliques et des substances osseuses corruptibles*. Paris: Masson.
- Department Store Merchandise Manuals*. 1917. *Department Store Merchandise Manuals*. New York: The Ronald Press Company.
- Description des machines*. 1856-66. *Description des machines et procédés pour lesquels des brevets d'invention ont été pris sous le régime de la loi du 5 juillet 1844*. Paris: Imprimerie impériale.
- Desormeaux, Paulin. 1854. *Nouveau manuel complet du fabricant d'objets en caoutchouc*. Paris: Roret.
- Dictionnaire du commerce et de la navigation*. 1861. *Dictionnaire du commerce et de la navigation*. Paris: Guillaumin.
- Dictionnaire du commerce et de la navigation*. 1901. *Dictionnaire du commerce et de la navigation*. Paris: Guillaumin.
- Dictionnaire du commerce et des marchandises*. 1859. *Dictionnaire du commerce et des marchandises*. Paris: Guillaumin.
- Dictionnaire universel du commerce*. 1851. *Dictionnaire universel du commerce de la Banque et des Manufactures*. Paris: Adolphe Delahays.
- Dictionnaire universel théorique*. 1859. *Dictionnaire universel théorique et pratique du commerce et de la navigation*. Paris: Guillaumin.
- Doussin-Dubreuil, Jacques-Louis. 1839. *Nouveau manuel sur les dangers de l'onanisme et conseils relatifs au traitement des maladies qui en résultent, ouvrage nécessaire aux pères de famille et aux instituteurs*. Paris: Roret.
- Dupin, Charles. 1862. "Rattier et Guibal—Caoutchouc." In *Exposition universelle de 1851: Travaux de la Commission française...* Paris: Imprimerie imperiale.
- Foucault, M. 1975. *Surveiller et punir: Naissance de la prison*. Paris: Gallimard.
- Foville, Dr Achille Louis. 1834. *Influence des vêtemens sur nos organes: déformation du crâne résultant de la méthode la plus générale de couvrir la tête des enfants*. Paris: Prevost-Crocius.
- Gariel, Dr M. 1853. "Mémoire sur les applications médico-chirurgicales du caoutchouc vulcanisé." In *Congrès scientifique de France, 19e session tenue à Toulouse en septembre 1852*, Vol. 2. Paris and Toulouse: Derache et Delboy.
- Giedion, S. 1948. *Mechanization Takes Command: A Contribution to Anonymous History*. Oxford: Oxford University Press.
- Gourlier, Charles Pierre, 1855. *Exposition universelle de 1851...*, Vol. 7. Paris: Travaux de la Commission française sur l'industrie des nations.
- Guillaumin, Gilbert-Urbain (ed.). 1841. *Encyclopédie du commerçant: Dictionnaire du commerce et des marchandises*. Paris: Guillaumin et C^{ie}.
- Guyot, Yves and Guermanovitch Raffalovitch, Artour. 1901. *Dictionnaire du commerce de l'industrie et de la banque*. Guillaumin: Paris.
- Hall, William Whitty. 1869. "Wearing Rubber Shoes." *The Guideboard to Health, peace and Competence or, The Road to Happy Old Age*. Springfield, MA: Fisk.
- Hancock, Thomas. 1857. *Personal Narrative of the Origin and Progress of the Caoutchouc or India-rubber Manufacture in England*. Paris: Longman, Brown, Green, Longmans, & Roberts.
- Homans, J. and Isaac Smith Homans. 1852. *A Cyclopedia of Commerce and Commercial Navigation, with Maps and Engravings: To Which is Now Added a Chart of the Bay and Harbor of New York, with the Soundings of East River, North River, Harlem River, Newark Bay, and New York Bay*. New York: Harper & Brothers Publishers.
- Hudson, P. 1992. *The Industrial Revolution*. London, New York, Melbourne, Auckland: Edward Arnold.
- Kelley, V. 2010. *Soap and Water: Cleanliness, Dirt and the Working Classes in Victorian and Edwardian Britain*.

- London: I. B. Tauris & Co.
- Kempf, R. and J.-P. Aron. 1978. *Le pénis et la démoralisation de l'Occident*. Paris: Grasset.
- Kopytoff, I. 2001. "The Cultural Biography of Things." In Daniel Miller (ed.) *Consumption: Critical Concepts in the Social Sciences*, Vol. 3, pp. 9-33. London and New York: Routledge.
- Laboulaye, M. C. 1853. *Dictionnaire des arts et manufactures, de l'agriculture, des mines...* Paris: L. Comon.
- Lacroix, Eugène. 1867. *Études sur l'Exposition de 1867 ou les Archives de l'industrie au XIXe siècle...*, Vol. 3. Paris: Librairie Scientifique, Industrielle et Agricole.
- Lévy, Michel. 1845. *Traité d'hygiène publique et privée*. Paris: Baillière.
- Lipovetsky, G. 1994[1987]. *The Empire of Fashion: Dressing Modern Democracy*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Miller B. M. 1981. *The Bon Marché. Bourgeois Culture and the Department Store, 1869-1920*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Miller, D. (ed.) 1997. *Material Cultures: Why Some Things Matter?* Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Paresys, I. 2008. *Paraître et apparences en Europe occidentale*. Lille: Presses universitaires du Septentrion.
- Perrot, P. 1981. *Les Dessus et les dessous de la bourgeoisie, une histoire du vêtement au XIXe siècle*. Paris: Librairie Arthème Fayard.
- Picard, Alfred. 1906. *Le bilan d'un siècle (1801-1900). Mines et métallurgie. Industries de la décoration et du mobilier. Chauffage et ventilation. Éclairage non électrique. Fils, tissus, vêtements...* Paris: Imprimerie nationale.
- Rapport du Jury*. 1844. "Tissus imperméables de MM. Ch. Boulanger et Cie, rue d'Hauteville, 35." In *Rapport du Jury central sur l'exposition des produits de l'industrie*. Paris: Imprimerie royale.
- Rengade, Dr J. 1887. *Les besoins de la vie et les éléments du bien-être, traité de la vie matérielle et morale de l'homme dans la famille et la société...* Paris: À la librairie illustrée.
- Riello, G. 2009. *The Spinning World: A Global History of Cotton Textiles, 1200-1850; How India Clothed the World: The World of South Asian Textiles, 1500-1850*. Leiden: Brill.
- Riello, G. and P. McNeil. 2010. *The Fashion History Reader: Global Perspectives*. Basingstoke: Routledge.
- Simmel, G. 1957. "Fashion." *American Journal of Sociology* 62: 541-9.
- Soeligmann, Th., H. Falconnet and Lamy Torrilhon. 1896. *Le caoutchouc et la gutta-percha*. Paris: J. Fritsch.
- Sohn, A.-M. 1996. *Chrysalides: femmes dans la vie privée*. Paris: Publications de la Sorbonne.
- Steele, V. 1997. *Fetish: Fashion, Sex & Power*. Oxford: Oxford University Press.
- Steele, V. 2001. *The Corset: A Cultural History*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Tamagne, F. 2008. "Le 'blouson noir': Codes vestimentaires, subcultures rock et identités adolescentes dans la France des années 1950 et 1960." In Isabelle Paresys (ed.) *Paraître et apparences en Europe occidentale*, pp. 99-104. Lille: Presses universitaires du Septentrion.
- Thompson, E. P. 1996[1968]. *The Making of the English Working Class*. London: Penguin.
- Thuillier, G. 1976. *La vie quotidienne dans les ministères*. Paris: Hachette.
- Turgan, Julien. 1865. "Rattier & Guibal." In *Les grandes usines: Études industrielles en France et à l'étranger*. Paris: Michel Lévy frères.
- Underwood, T. & G. 1847. *The Repertory of Patent Inventions*. London: Alexander Macintosh.
- Veblen, T. 1994[1899]. *The Theory of the Leisure Class*. London: Penguin Classics.
- Verley, P. 1997. *L'échelle du monde: Essai sur l'industrialisation de l'Occident*. Paris: Gallimard.
- Vibert, Paul. 1895. *La Concurrence étrangère: Industries parisiennes, politique coloniale*. Paris: Berger-Levrault et Cie.
- Wilson, C. P. 1992. *White Collar Fictions: Class and Social Representation in American Literature, 1885-1925*. Athens, GA: University of Georgia Press.

〈図版〉

- Figs. 1. (a) ルビグル店の広告。ゴム製衣服、コート、靴をあつかう。(1855年 著者所蔵) (b) ホグマン社の広告(1865年頃 著者所蔵)
(a) Advertisement for Lebigre, rubber clothing, coats, and shoes, 142 rue de Rivoli, Paris, 1855 (Manuel Charpy). (b) Advertisement for Hodgman, India Rubber Goods, 27 Maiden Lane, New York, c. 1865 (Manuel Charpy).
- Fig. 2. (a) 身体を着飾る万能の素材。独創的なラバー・ストア社は、1839年にボストンとニューヨークで設立。グッドイヤーの特許をもとに製造していた。(1860年頃 著者所蔵) (b) ハンコック社の図版(1857年 著者所蔵)
(a) A universal material to dress the body. The original Rubber Store, under Goodyear's patent, established in 1839, Boston and New York, c. 1860 (Manuel Charpy). (b) Plate from Hancock (1857) (Manuel Charpy)
- Fig. 3. パリのドーフィヌ広場のガラントが刊行した「加硫ゴム——医療及び外科目的で用いられる装置と器具」(1853年 フランスとイギリス、スペインにて刊行)
Galante, Place Dauphine, Paris, "Vulcanized Rubber: Catalog of Medical and Surgical Devices and Instruments," 1853, published in French, English, and Spanish (série Actualité 120, Bibliothèque historique de la Ville de Paris).
- Fig. 4. (a) シャーヌ社のカタログ。整形外科器具や帯具、局部サポーター、ベルト、コルセットをあつかう。(パリ 1890年頃) (b) 人工乳房、男性用および自転車乗り用のゴム製のふくらはぎ当てと帯具。ゴム製品製造のクラヴェリ社のカタログ(1890年頃)
(a) Chêne's catalog, orthopedics, bandages, jockstraps, belts, and corsets, Paris, c. 1890 (série Actualité 120, Bibliothèque historique de la Ville de Paris). (b) Artificial breasts, and rubber calves and bandages for men and cyclists. Clavierie's catalog, rubber goods manufacturer. c. 1890 (Archive de Paris, D2U6/110, 1896).
- Fig. 5. (a) ハッチンソン社のカタログ。女性用の防水服。(パリ 1900年) (b) 作業着のカタログ、御者と運転手のページから。(パリ 1900年頃)
(a) Company Hutchinson's catalog, waterproof clothes for women, Paris, 1900 (série Actualité 120, Bibliothèque historique de la Ville de Paris). (b) catalogs of work clothes, page about cabmen and drivers, Réaumur, Paris, c. 1900 (série Actualité 120, Bibliothèque historique de la Ville de Paris).
- Fig. 6. フレデリック社のカタログ。ゴム製のコンドームと性具(パリ 1895年頃)
Frederic's catalog, rubber condoms and rubber sex toys, Paris, c. 1895 (Archive de Paris, D2U6/110, 1896).

[編集者註]

本稿は Charpy, M. 2012, "Craze and Shame: Rubber Clothing during the Nineteenth Century in Paris, London and New York City," *Fashion Theory*, 16(4): 433-460. の翻訳である。

Reproduced by permission of Routledge, Taylor & Francis Group, Charpy, M. 2012, "Craze and Shame: Rubber Clothing during the Nineteenth Century in Paris, London and New York City," *Fashion Theory*, Volume 16, Issue 4, pp.433-460, © 2012 Berg.

マニユエル・シャルピー (Charpy, Manuel)

リール第3大学北方歴史研究所研究員 (IRHIS, University of Lille III)。専門は19世紀の物質文化、映像文化-主な論文に「Le spectacle de la merchandise : Sortie au théâtre et phénomènes de mode à Paris, Londres et New York (1850-1914)」(2014年)、「La place des choses : Economie de l'ordre et du désordre domestiques en bourgeoisie」(2012年)など。

(※肩書は掲載時のものです)